

校長室だより～和光高校今昔 第37号 H27. 1. 16

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

卓球部のかがやき

紆余曲折、和光高校部活動で多分最も多くの歴代顧問を数えたのが卓球部ではないだろうか。それは、残念ながら特筆される成績を収めることが出来なかった（バレー部もそれに近いが）歴史と重なる。ただし昭和57年度の1年間に限っては一際輝く年となった。柿岡俊一という得難い人物のおかげである。当時の正顧問は酒井利博、あだ名は「E. T.」。流行った映画の主人公？に似ていた。その酒井の口癖「柿岡さんのおかげ」がこのことを証明している。酒井は現在故郷新潟で教師を続けているが、卓球に関しては素人同然、それどころか典型的な運動嫌い・運動音痴であった（スキーを除く）。その彼が顧問を任されたことが卓球部の位置を表している。悪戦苦闘を経ての57年度だったがこの年着任したのが新卒英語教師柿岡であった。現実には非常勤講師であったから副顧問ですらない。ただし極めつけの「体育会卓球部あがり」の熱血漢であった。

卓球部の創部は昭和49年、開校3年目にさかのぼる。最初は男子のみ、顧問は神山・鷺谷兩名であったが翌年にはもう前田・井上に代わる。女子も加わる51年は井上だけが残るが翌年は井上も抜け、須藤・嶋村が続けて男女顧問になる。この体制が数年続くものの吹奏楽部成立に伴い須藤が抜け、嶋村も転出しよいよ昭和56年に酒井の出番となる。創部8年で12人目の顧問であった。この間の生徒の労苦は「若樹」にも次のように綴られている。曰く「技術的な指導者不在の中…」(3号・5号)、「プレハブの砂ぼこりの積もる卓球台で…」(4号)等々。付け加えると56年度は格技場が完成し、体育館2Fフロアーを卓球部が占有した年でもあった。ただし「技術的指導者不在」は相変わらずだった。酒井はE Tに似ていたが男気が強くこの状態を心から憂い、同じ数学科・同期のバドミントン部顧問西見に相談しつつ現状脱却を図ろうとしたが好転の兆しはなかった。その中に救世主となる柿岡が登場する。繰り返すが立場はあくまでも非常勤講師である。最近の柿岡の活躍を示す記事がある。

全日本模擬国連大会優秀賞を獲得する浦和第一女子高校時代の記事から（2010年）

（一女では）毎年、全日本大会への参加希望者を募って活動している。指導に当たるのは、留学生の受け入れおよび派遣、ディベートなどを管轄する国際交流委員会の教員だ。

「指導で大切にしているのは、生徒の気持ちに火を点けること。最初に少し手をかけて意欲を引き出せれば、あとは放っておいても生徒は自分たちで進んでやるようになります。他校との合同練習会も生徒に刺激を与え、ますますやる気になるようです。また、参加を

重ねていくうちに先輩や卒業生が後輩の面倒を見てくれるようになり、教員は生徒のモチベーションが下がらないように励ますだけです」(柿岡俊一先生)。



トップ校でも年齢を重ねても変わらぬ指導の真髓が見て取れる。恐る恐るの「卓球部の練習に出てもいいでしょうか」の謙虚な一言から始まり、すぐに酒井の全幅の信頼を得て、二十数年後に英語教育でも花開く柿岡のこの信念が和光高校卓球部を开花させる。たった1年であったが(翌年柿岡は採用試験に合格し他校で正規採用となる)卓球部は変わる。戦績においては女子団体戦新人大会県ベスト16進出とそれま

での実績からはおよそ信じられないような結果を出した。柿岡の転出により翌春の「関東」の夢は絶たれたもののまさに県卓球界に彗星のごとき現れた和光卓球チームであった。生徒と共に汗を流し妥協を許さない指導の一つの現れが立役者の一人、女子主将として牽引した金子早苗(10期生)だ。2年時の校内マラソン大会優勝はまさに猛練習の賜物。朝練で課した体力づくりのBコースが、当時全盛のバスケット部や陸上部の牙城を崩した。柿岡は常に生徒と一緒に走る。少なくとも朝練や真剣なランニング自体それまでの卓球部にはなかった。そして金子は翌年筑波大学第一学類への進学を果たす。教え子なので敢えて述べるが、同期の藤本裕子や田代誠などの才気煥発さは金子にはない。金子の持つひた向きで努力を惜しまない姿勢と難敵に立ち向かう勇気こそ卓球部で学んだ柿岡の教えだったのだ。強歩大会に勝ち、国立大学に進学するという和光史上最強の「文武両道」はまさに柿岡が残した遺産だった。そして57年度9期生の卒業アルバムの卓球部には柿岡のみが映る。酒井独特のダンディズム、精一杯の感謝と敬意のあらわれであった。

現在浦和西高で勤務する柿岡は変わらぬ熱さで学習・部活動指導に取り組み、文武不岐を具現化している。1年限りであったが和光高校最高の指導者の一人であろう。

